

推理小説の近代と名探偵ホームズの憂鬱

宮崎かすみ

1. 近代的個人の成立と小説ジャンルの誕生

探偵嫌いで知られていた夏目漱石であったが、「二十世紀の人間はたいてい探偵のようになる傾向がある」(夏目 530)として、探偵、もしくは探偵的眼差しこそが近代に固有の問題系の根源と認識していたことがわかる。後年『彼岸過迄』において、名探偵ホームズのパロディとも、批判とも思える「迷探偵」を登場させながらも、内面への深い心理分析を展開させる手腕は、まさに探偵的眼差しを取り込んだことの証左である。この境地に至って初めて漱石は近代文学の聖典ともいえる『心』を生み出すスタート地点に到達したといえよう。本報告では、漱石に導かれて、近代小説の本質としての探偵的眼差し、推理小説的要素を措定し、まずは小説が誕生した歴史的な脈のなかに辿ってみた。

Foucault は規律的な権力が生まれた 18 世紀に近代的なアイデンティティが成立し、またそうした権力の編制に伴って、文芸において個人の物語が語られる方向性へ—叙事詩的なものから小説的なものへ、華々しい行為から秘密の個別性へ、長期間の流瀆から幼少年期の内面的探求へ—と焦点の移行が生じたと指摘する(フーコー195)。この個人のアイデンティティという概念に呼応して生まれたのが小説というジャンルであった。小説を成立させたナラティブの主体は近代的自己であるが、その成立には、秘密・プライバシー・孤独の3条件が必須であった(Laqueur226)。個室で孤独に己の心の秘密と向き合い反芻する近代的自己が自分の内面を言葉にするツールとして小説的ナラティブを生み出したとすれば、孤独が確保されて秘密を抱えられる環境は、罪の暴露や謎解きを扱う推理小説にとっても都合がよかつただろう。秘密を抱えた心を抱う近代小説は、その成立の前提からして推理小説と親和的であったのである。

2. 二つの変質論と「見えない本質」

近代以降、本質的なもの、真実とされるものは内奥へと潜りこみ目に見えないものとなっていったという Foucault のエピステーメーの変容の指摘も近代小説の構造理解に示唆的である。「存在の大なる連鎖」の世界観が解体され、本質は奥深くに潜って不可視となった。物事の本質や大切なものは最も秘められた奥深くに潜ってゆき、普段は目につかないものとなったのである。こうした表象の変化に呼応するように、近代では疾患は脳の神経細胞を蝕む病理によって引き起こされるという病理モデルが誕生した。ことに近代化と産業の進展による刺激過多や環境汚染などが脳を疲弊・消耗させた状態にし、それが様々な疾病の原因であるとする変質論という病理モデルが 19 世紀半ばにフランスの精神科医 Bénédict Morel によって提唱された。精神病の原因を脳細胞の病変に求めたのはこれが最初で、狂気の外的兆候を重視する従来の手法とは異なっていたが、瞬く間に世を席卷した。

ほかに人類学由来の変質論の系譜があり、これは異人種間交配によってもたらされる変質を指す。異人種間の交配では活力のない虚弱な子が生まれ、何代か進むと元の種に先祖帰りするという考え方である。イタリアの Cesare Lombroso が提唱した生来性犯罪者説はこちらの変質論(退化論に近い)に根差しており、ある種の犯罪者は何代も前の祖先に先祖帰した人間で、文明社会の道徳性や倫理観を持ち合わせていないため反社会的行為を犯すように生まれついている、という見解である。人類学者でもあった Lombroso は頭蓋骨の形状などに退化の刻印があると信じ、そうした人々をあらかじめ識別できるように刑務所の膨大な数の受刑者写真を収集して身体的特徴を抽出することを目指した。

この説は 1890 年の解説本を皮切りにイギリスにも紹介されたが、初期の紹介者の一人 William Morrison は勤務していたワンズワース監獄で Oscar Wilde と接触し変質論の見地から政府に報告書を提出したものの、その内容は内務大臣らを困惑させた。当時のイギリスでは政府や学界レベルでは生来性犯罪者説に対する批判が根強く、受容に抵抗があったが、監獄や臨床の現場、文壇などでは受け入れられた。自ら医者である Conan Doyle も積極的に取り入れた一人であった。とはいえ 90 年代以降のいくつかの作品に限られたものと見なすのが妥当であろう。

3. 近代小説として読むホームズ物語—秘密の暴露とセクシュアリティの隠蔽

近代以降、内奥に潜っていった「秘密の真実」に呼応するように、小説という近代のナラティブも内部に秘められた真実を目指し、それを暴こうとする指向を本質的に備えていたと言えよう。つまり探偵的眼差しを備えていることは小説の条件ともなったのだが、同じように探偵的眼差しによる推理を専らとする推理小説は、普通の小説とどう違うのか。その観点から、主に、家庭内の秘密を主題とする小説的な趣きの濃いホームズ物語をいくつか分析した。

‘A Case of Identity’ (1891) や ‘The Adventure of the Copper Beeches’ (1892) に共通するのは、巨額の財産をもつ娘が、婚姻によってその富が親の自由になくなるといった事態を阻止するために、親が娘の結婚の邪魔をするというプロットである。いずれも凄惨な殺人などとは無縁で、謎めいてはいるものの恋愛や結婚が焦点となる点で普通の小説に近いと言えよう。前者は義理の父が娘の前に別人として現れ、娘の心を奪ったのち姿を消し、恋心を募らせた

娘は傷心のままに、想い人が義理の父とは気づかぬままその再現を待ちわびる。娘の心を弄ぶ義父と実母の卑劣さは際立つが、娘のぼんやりした様子のせいで悲惨さよりも滑稽味が際立つ。「ブナ屋敷」は、のどかな田園を舞台にするが、Holmes は平和的な田園こそ、恐るべき悪事を秘めているものだという逆説的見解を披露する。家々が離れて点在するために悪事を秘密にしておくことが容易だからだという。見かけとは裏腹、というこの逆説的設定は、外見を裏切る変質論のプロットを導く。外見に特徴が表れると想定する生来性犯罪者説とは対照的に、本来の精神医学由来の変質論は内部の変質は目に見えないものとしていたことから、こちらの方が本格的推理小説とは折り合いがよい。「ブナ屋敷」の愛想のよい雇い主は善人なのか腹黒い悪人なのか判別しにくい。田園の舞台設定といい、内奥の本質を隠す外部が細やかに設定されているこの作品は、他の文学作品への参照も多く作者が小説らしさにこだわって書いた労作と言えよう。

また、この雇い主が最後に飼い犬に襲われて瀕死の重傷を負うという結末は、*The Hound of the Baskervilles*(1901) を彷彿とさせる。変質論を採用している点でも共通している両作品だが、後者は、一度は亡くなったはずの Holmes の復活劇とあって入念な変質論のプロットが全編に張り巡らされている。特徴のない容貌をしてなかなか本性を現さない Stapleton という犯人は、異形ぶりを誇るホームズ物語の犯人たちに比べるとはるかに洗練された容姿が与えられている。他方、退化した犯罪者、という Lombroso 説由来の脱獄囚の Selden は見るからに粗暴な獣性が見て取れる外見を備えているが、これが、Stapleton における表象と本質の乖離という小説的要素を一層際立たせている。

家庭内の秘め事や悪事を扱うこれらの作品ではあるが、一般の小説とは違い、恋愛感情や性的欲望、親子関係などのテーマには深入りしない傾向が認められる。さらに、セクシュアリティはかなり露骨に忌避されていると言える。‘*The Adventure of Solitary Cyclist*’ (1904) で起こる事件は、家庭教師として勤務する若い女性が馬車から引きずり降ろされ木立のなかに連れ込まれて、牧師が司る結婚式に無理やり立ち合わせられ結婚させられるというものだった。これもこれまでの二作品と同じく、娘の相続遺産を狙っての犯行だが、若い娘が木立のなかに引きずりこまれたとなれば普通は強姦が想像されるであろう。それが結婚式とは少々拍子抜けする。ここに共通するのは、性愛の問題は不自然なほどに忌避され、代わりに金銭の問題へと置き換えられている点である。言い換えれば、セクシュアリティは抑圧・隠蔽され、代わりに金と欲にまつわる経済的動機が悪事の動機として前景化される。

この作品ではタイトル通りに、一人で自転車に乗る女性が描かれるが、当時自転車に乗る女性は、自立心旺盛で男勝りなタイプの女性の記号であった。加えて、この *solitary cyclist* というタイトルには、*solitary vice* と呼ばれていたマスターベーションを連想させるものがある。事実、当時の性科学では自転車に乗る女性が性的快楽を感じていると主張していた¹。

このように、セクシュアリティをことさらに隠蔽し抑圧する一方で、性的欲望—というより倒錯的欲望—を仄めかすもする独自の文法を、ホームズ物語が備えていたと思われるもう一つの例を、‘*A Scandal in Bohemia*’ から指摘した。ホームズが彼女だけを she と呼ぶ特別な女性、美貌と才気を誇る Irene Adler は、音域が女性最低音、コントラルトのオペラ歌手、紳士に扮装して Holmes を出し抜いたこともあるという男性の記号を帯びている例外的な「女性」である。結婚を間近に控えたボヘミア王が、その交際をネタに彼女本人から強請られているという話なのだが、このプロットも不自然さが否めない。身分の高い王族が独身時代に愛人の一人や二人いるのは普通のことで、これほど心配することだろうか。だがこれを男性同性愛の関係を暴露するという強請りと仮定すれば、当時よくあることだっただろうと腑に落ちる。R. L. Stevenson の *New Arabian Nights*(1882)には、お供の大佐とロンドンの街を冒険するボヘミアの王子が登場、パリの自由な芸術家たちを描いた Puccini のオペラ作品、*La Bohème*(1896、原作は1849)など、ボヘミアという言葉には当時男色の含意があったのではないか。そうすると、この作品も男色の暴露に怯えるボヘミア王の話としても読めるかもしれない。もちろんセクシュアリティの抑圧的表現は当時一般的であり、ホームズ物語が特別真ましいわけではない。秘密の暴露、という近代に特有の主題を担いながらもホームズ物語は、ヴィクトリア朝社会が警戒した性的欲望を無難な金銭的欲望へと転換させ、リスペクタビリティには抵触しない語りの場を確保しつつ、剣呑な毒を隠蔽しつつ仄めかしもしていたという独特のナラティブを展開していたと言えるのではないか。

とはいえそれは一般的小説とは一線を画する。‘*The Yellow Face*’ (1892)では、妻が隠すものを夫は必死に暴こうとする。Holmes はそれを妻の不倫と決めつけるが、隠していたのは前の夫との間の愛児であった。愛を扱うのがとことん不得手な Holmes は人間の働く悪事を暴くことこそが真骨頂。ホームズ物語はやはり推理小説なのである。

¹ ‘Sexual irritation may also be produced by the bicycle in women. Thus, Moll² remarks that he know many married women, and some unmarried, who experience sexual excitement when cycling’, in Havelock Ellis, *Auto-Erotism: A Study of the Spontaneous Manifestations of the Sexual Impulse in Studies in The Psychology of Sex* vol. II, New York:Random House, 1942, p. 177.

Works cited: ミシェル・フーコー『監獄の誕生—監視と処罰—』田村俣訳、新潮社、1997年。

Laqueur, Thomas W. *Solitary Sex: A Cultural History of Masturbation*. New York, Zone Book, 2003.

夏目漱石『吾輩は猫である』『漱石全集』第1巻、岩波書店、1993年。